

---

# 桜舞う音

桜月まき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜舞う音

### 【Nコード】

N1752F

### 【作者名】

桜月まき

### 【あらすじ】

ぼくはあの日、桜の精に出逢ったんだ。∴ピアノに挫折した「ぼく」こと、高校に入学したばかりの主人公・崎谷浩央の淡くせつない恋物語です。ちよっぴりせつない恋心を描けたらいいなあ∴そんな桜月まきスタイルの、ラブストーリーイイです。

序 前奏曲（前書き）

## 序 前奏曲

今年も、この季節が巡ってきた。

窓越しに淡く煌めく薄紅のその花の色が、廊下を歩くぼくの視界を遮る。

思わず涙が滲む。心躍るような、それでいて、悲しいような、不思議な感覚は、何年経っても変わらない。

…変わったのは。

ぼくは右手をぐっと握り締める。本当は左手にも力を入れたかった。けど、手にしていた一枚の葉書がくしゃくしゃになってしまわないよう、無意識に気を遣っていた。

廊下のつきあたりのドアを開ける。予想通り、誰もいなかった。ぼくはほっと短く溜息をついて、まず窓を開ける。本当はピアノ室の窓は開けてはいけなのだが、こんな日に、どうしても開けずにいられるというのだ。

…やっぱり、綺麗だ。

窓一面に広がる桜色。おそらく学内で一番古い、立派な桜の木だ。枝々、競うように花をつけている。ひとつひとつの花びらは、ごくごく淡い色…白に近いくらいなのに、全体で見ると、どうしてこんな

なに上品なピンク色になるんだろう。

しばらく窓から桜を眺めて、ぼくはピアノに近付く。

ピアノと桜。

ぼくの、大好きな、大切な、もの。

この二つがあるここは、ぼくの一番落ち着ける場所。ピアノ室なんて学校にはいくらでもあるし、この部屋のピアノはそんなにいいピアノではないけれど、この部屋はぼくにとっては特別。

…一番綺麗に、桜を観ることが出来るから。

『あんまり桜を見ていると、桜の魔力にとり憑かれてしまうわよ。』

ピアノ越しに窓を眺めていると、あの声が、まるで今この場で聞こえたみたいに、ぼくの耳に入ってきた。

目を閉じると、すぐにあの人の、消えそうな柔らかい笑顔が、浮かんでくる。

…あの日。

ぼくは持っていた葉書を、譜面台にあえて宛名面を上にして置いて、椅子に座る。ピアノの蓋を開けて、そっと鍵盤に手を添える。

と、不意に風が吹き、桜の花びらが一枚、鍵盤の上にふわりと舞い降りた。

…桜の精、みたいだな。

そう思ってから、ぼくはくすつと静かに笑う。

そう、あの日。

ぼくは、本当に桜の精に、出会ったのだ。きっと本当に、…桜の魔力に、とり憑かれてしまったのだ。

鍵盤の上の桜の花びらを、そつと譜面台の、葉書の上に乗せて、ぼくはあの曲を…あの人の為の曲を、奏で始める…。

あの人と…桜の精と出逢った、あの日を、あの頃を、思い出しながら。

## 一 春到来 (1)

その頃ぼくは、生まれてはじめての、大きな人生の挫折を味わったばかりだった。ちょっと大袈裟な気もするが、その頃のぼくにとってはそのくらい、大きなショックだったんだ。

生まれてはじめての、大きな人生の挫折。

…それは、地元では有名な音大の、付属高校ピアノ科の入学試験に落ちてしまった、ってこと。そして、音楽…ピアノとは全く関係のない、近所の普通の高校に、進学が決まってしまった、ということ。

物心つかない頃からピアノをはじめたぼくは、近所ではちょっとした天才ピアニストだった。

聴いた曲はその場ですぐ弾くこともできたし、なによりピアノを弾くことが好きで。一日中ピアノを弾いていても、全く飽きることはなかった。

ぼくより先にピアノを習い始めた四つ年上の兄のレベルをあっという間に追い越したせいで、兄はピアノを辞めてしまった。今では音楽とは一切関わっていない。本人は音楽より楽しいことを見つけたんだ、なんて言っていてあっけらかんとしているけど、本当は今でもピアノを弾きたいんじゃないかってぼくは思う。

昔から一番ピアノで好きなのは、即興だ。美しいとか、気持ちよいとか、素敵だなあ、綺麗だなあ…と感ずるとすぐ音が聞こえてきて、簡単にそれを奏でることができた。…楽譜がなくても、自分の思うとおり、好きなように指を動かすだけで、旋律に、音楽になっ  
ていくのが、ぼくはすごく好きだった。

小学校でも中学校でも、入学式とか卒業式とか、イベント時のピアノ演奏はぼくが必ず演奏していたから、近所でぼくのピアノを知らない人はいないんじゃないかなあ。

そんなぼくに、親も、ピアノの先生も、迷わずその音大付属高校ピアノ科受験を勧めた。ぼくもだんだん将来のことを考えたりしてピアノを一生やっていけたらなあ…なんて思っていたから、その意見には乗り気だった。ピアノ科に入って、音大に行つて、ピアノストになる…そんなキラキラした夢が、目の前にあつた。

誰もが受かると思っていただろう。事実、僕自身も、そう思っていた。

…だがそこには、大きな落とし穴が、待っていた。

もともと即興演奏が得意なぼくは、きちんと正確に楽譜どおりに弾く、ということが苦手だ…実際好きではなかった。ノリ…っていうか、その時の気分がかなり反映されてしまう。

それが、受験の時の試験官には受けなかつたんだらう。

信じられないことに、音大付属高校ピアノ科、不合格の通知を受け取る。



…目の前が、真っ暗になった。

ピアニストの夢は、霧のように消えてなくなった。

自分はピアノが上手いと思っていた。周りもみんな、認めてくれていた。はつきり言って、それが自慢だった。

でもそれは…間違いだったのか？

井の中の蛙…ちょっとピアノが得意だからって、いい気になんないよ。そのくらいのレベルのヤツは、世の中にゴマンといるんだ。そう言われた気がした…。

周りの目、自分への失望…。角を曲がったら、いきなり高い高い壁に行く手を阻まれたような…引き返そうにも、もと来た道も崩れてしまっているみたいない…どうすることもできない、絶望感。

…ぼくはピアノに鍵をかけた。もう二度と、弾けないように。もうぼくには、美しい旋律を奏でることはできない…。

そんなぼくを見て、兄は優しく言った。

ピアノだけが、人生じゃないだろ。他にも夢中になれるもの、いくらでもあるぞ、と。

幸いぼくは成績がそれほど悪かったわけでもなく、そのあとなんとか家から一番近い、公立高校の普通科に合格することができたわけだけど…。

あれ以来、ピアノは触っていない。



## 一 春到来 (2)

…他にも夢中になれるもの、…か。

ぼくは兄の言葉を思い浮かべ、今日から三年間、高校生活を送ることになった校舎を、正門の前でつつ立って眺めながら、短く溜息をつく。

登校時間にはまだ少し早かったようで、正門をくぐる人はほとんどいない。時折グラウンドのほうから、運動部の朝練らしき掛け声とかが聞こえる程度。

四月とはいえ、まだ朝は肌寒い。首をすくめる。と、真新しい制服の襟が硬くてちよっと痛かった。

入学式の時は、なんかバタバタしてて、こうしてゆっくりと正門から校舎を見上げる、なんてできなかったけど…。こうして眺めてみると、なんだろう、これからはじまる新しい生活に、不安と…ほんの少しの期待が混ざったような、複雑で、落ち着かない心。

前なら、こういう時にも音が聞こえた。ぼくの感情を的確に表現してくれる旋律が、ぼくの体中を流れていた。

けど今は。

もう、なにも聞こえない。

鼻の奥がつんとした。…カッコ悪い。まだ女々しく泣く気かよ。

奥歯を噛み締めて、ふるふる、と軽く頭を振る。そしてまた、正門越しに校舎を見つめて、いざ、動き出す。

正門を、くぐり抜ける。

新しい自分の、スタートだ。気持ちを切り換えて…しゃきっとしろ。

正門をくぐった途端、さっきは見えなかった風景が、僕の目に飛び込んできた。校舎の陰になって見えなかった…体育館まで続く、桜並木。

入学式の時はまだ桜が咲いていなくて、気づかなかった。今も、満開とまではいかないけど…それでもどの木も、何年も何年もここで生徒を見守ってきたんだろう、立派な枝を、のびのびと伸ばしている。

…五分咲き、くらいかな。

そう思いながら無意識にぼくは桜並木に近づいていく。

…綺麗、だなあ。

ほう、とさつき正門の前でついていた溜息とは全く異なる気持ちの溜息をつく。

その時、ぼくは桜並木の下に、誰かいるのに気がついた。

…さらさら、髪の毛の長い、セーラー服姿。制服でわかる、新入生で

はないから…二年生か三年生の先輩だ。彼女はぼくの存在に気づかず、ただ桜の木を見上げて、今にも咲きそうな蕾に、手をかざそうとしている。

遠目ではつきりとはわからないけど、その表情は、心から桜を愛しているかのように、柔らかく、幸せそうで…でもそれでいてどこか淋しげな…哀しい微笑。

彼女の姿は…朝のきりりとした空気と、桜の淡いピンク色に染まって…まるで、桜の花を咲かせに来た春の妖精のようで…制服を着ているのに妖精って、って思つかもしれないけど、ぼくには本当に妖精のように儂く、美しく見えた。

桜の精…もしくは、春の精。桜の開花を手助けする、春の妖精。

なんて綺麗な人なんだろう…。

ただただ、見惚れてしまって、ぼくはその場で立ち尽くす。彼女に、彼女を取り巻くこの風景に、魅了されて…指一本、動けない。ただ、見つめているだけ。

その時、…聞こえないはずの音が、聞こえたような気がした。

そんなはずはない。ぼくにはもう、聞こえないんだから。気のせいだ。すぐに打ち消して、彼女を見つめなおす。

すると彼女はぼくじゃない何かに気がついて、桜から手を離し、誰かに小さく手を振りながら、優しい笑顔でぼくとは反対側…校舎のほうに、駆けていった。

彼女が去ったあとも、ぼくはそこにしばらく立っていた。彼女をみている時間はきつと一瞬だったんだろうけど…永遠のような、気さえしていた。

…他にも夢中になれるもの。

また、兄の言葉を思い出す。

一 春到来 (3)

その時。

「浩央こうおくん？」

後ろからぼくを呼ぶ声がした。ビックリして振り返ると、幼い頃から見慣れた真っ黒なショートボブのセーラー服姿が、ぼくを見つけて立ち止まっていた。あの人に目を奪われていて気づかなかったけど、正門からはさっきよりたくさん生徒が登校してきている。

「何してるの？ そんなところで。」

「明日香あすか先輩。」

…実はあんまり会いたくなかった。同じ高校なんだから、遅かれ早かれいつかは会うことになるだろうと思っていたけど…初日の朝に出くわそうとは。

曖昧に笑ってぼくは明日香先輩のところまで歩いていく。明日香先輩は、ぼくのピアノの先生の娘さんで、この高校の三年生。一週間前に先生の家に、この高校に受かったことと、ピアノを辞めることを告げに言った時、一瞬だけ顔を合わせて以来だ。

「靴箱、こつちだよ。まさか迷っちゃった？」

はにかんで笑って、明日香先輩が言う。ぼくはまた曖昧な微笑。

「あんまり桜が綺麗なんで…見惚れてました。」

本当は桜に見惚れてたというより、あの人に見惚れていたんだだけ。

ぼくは明日香先輩と並んで昇降口まで歩き出す。しばらく二人、無言で歩いていった。きつと明日香先輩も気まずいんだろう。なんてたって、ぼくも明日香先輩も、ついこの前までは、まさかここにはぼくがいるとは思ってもみなかったのだから。

靴箱の近くまできて、明日香先輩がようやく口を開いた。

「…ほんとにピアノ、辞めちゃったの？」

…それを聞かれるだろうから、会いたくなかったんだ。

ピアノの先生の娘だから、当然明日香先輩もピアノはぼくや兄と一緒に習っていたんだ。でも明日香先輩も、ぼくが追い抜いてしまったせいだろう、ピアノは辞めてしまっている。兄と違って一切弾かないってわけではないし、確か高校から吹奏楽部に入部したって聞いているから、音楽は辞めたわけではないんだけど…。やはりぼくのどこかに、兄に対するものと同じ、罪悪感、みたいなものはある。それはぼくがピアノを弾き続け、賞賛され続けることで、誤魔化せてるはずだった。

…今となつては、罪悪感の上のしかかる、後ろめたさ。

そんな気持ちのまま、ピアノを弾くわけにはいかない。続けることのほうが、今のぼくには、さらに苦痛なんだ。



ぼくは明日香先輩の目を真っ直ぐに見て、答える。

「決めたんです。もう、ピアノには触らない。」

…あまりにもきつぱりとそう言うぼくに、明日香先輩は短く溜息をついた。

「…そっか。そうなんだ。」

そしてちよつと気持ちを切り換えるように微笑んで、明日香先輩はぼくに言う。

「じゃさ、よかったら吹奏楽部、見においでよ。浩央くん音感あるから、初めての楽器でも問題ないよ。」

「ありがとうございます。でも、」

ぼくも真似して微笑んでみせる。同じく、気持ちを切り換えるように。

「音楽以外で、探してみます。…他に、夢中になれるもの。」

兄の言葉を、そっくりそのまま、言ってみる。自分自身に、言い聞かせるためにも。

「そう…。わたしに何か手伝えることがあったら言ってね。…じゃ、わたしこっちだから…。」

明日香先輩はちよつと淋しげにそう言って、ぼくに手を振って階段を昇っていく。明日香先輩の後姿に、ぼくは声に出さずにありが

とつとつぶやく。

兄も、明日香先輩も、二人とも…目標を失ったぼくに、何故か優しい。でもそれが、嬉しいよりもむしろ、少し悲しい。

ふいにさつき見た、桜の下のあの人を思い出す。なんとなく、真っ暗だったぼくの心に、光が射した…ような気がした。

…そうだ。ぼくはこの高校で、他に夢中になれるものを、探してみよう。

もう一度そう決意して、ぼくは教室へと向かう。

一 春到来 (4)

ぼくが卒業した中学校と同じ市内にあるこの高校には、同じ中学の同級生が何人も入学している。同じクラスにも、見知った顔がいくつかあった。

けど、入学してから、ぼくに声を掛けてきた同級生は一人もいない。誰も声にしないけれど、なんで崎谷浩史さきやひろしがこの高校にいるんだ、音高へ行くんじゃないかったのか、音高どうやら落ちたらしいよ…なんて噂が広がっているのは目に見えてわかる。気を遣っているのか、さまざまろと思っているのか…まあ、どちらかなんだろう。

入学式の日はそのような周囲の目がすごく気になって気になって、でもピアノにはもう頼れない…気が重くて仕方なかったんだけど。

あの瞬間以来、そんなことはどうだってよくなった。

ただ、あの朝の、あの桜の下の光景が、目に焼きついて離れない。家に帰ってから兄にこの話をしたら、夢でも見てたんじゃないか、それか幽霊でも見たんじゃないか、なんて茶化したけど…。

時間が経つてもなお、鮮明に覚えている。

桜の下にいた、桜の精のような、綺麗な人。桜の花のように、柔らかく、儚く、微笑んでいた…。

夢じゃない。多分幽霊でもない。幻…にしてははつきりしすぎている。

あの人を見つけて以来、僕はもう一度彼女を見たくて、会いたくて、仕方がない。

その日から毎日、ぼくは学校に着くと、その人を探している。

学校にいる間、授業中以外のぼくは、きよろきよろしていきなり挙動不審だと自分でも思う。余計に同級生は声を掛けにくいだろう。

正門のあの桜並木をはじめ、教室の移動のたび、全校集会なんかがあるたび、廊下や階段…すれ違う生徒を見ては、彼女を探している。

…ぼくより上級生で、さらさらの黒髪の、美しい人。

たったそれだけの手掛かりでは、簡単に見つかるわけもなく…。

同級生ならもっとすぐに見つけられそうなものの、上級生は教室の階が違つので、出会う確率も減ってくるし…。

兄の言うとおり、夢か、幻でも見てたんだろうか。幽霊だったんだろうか。

最初のあの日から一週間くらい経っていた。もう高校生活にも慣れ始め、ピアノを弾かないことにも少しずつ慣れてきた、ある日。

その日の四時間目は授業が始まってから初めての体育で、オリエ

ンテーションの後、グラウンドで50m走のタイムを計ったりしていた。

同じグラウンドで三年生の女子も体育の授業をしていたので、ぼくはそっちに目がいつてしまう。もちろん変な意味ではなく、彼女を探すために。

ちらちらよそ見をしているうちに、50m走のタイムを計る順番が周ってきた。走るのは苦手ではないし、わりと速いほうだと思うので、あんまり気負うこともないかわりに、ストレッチなんかを侮っていたのかもしれない。

「よおい…スタート!!!」

体育の先生の掛け声で、クラスメイトと五人くらいで走り出す。

走り始めて…五秒か六秒、ゴール直前。

なにかに躓いて、見事に転倒してしまった。

…咄嗟に、いつもの癖で、指を庇う。ズサアツ、と膝をすりむいて、流血。

「大丈夫かあ？」

体育の先生が寄ってくる。クラスメイトも何人が集まってきた。…恥ずかしい。

「だ、大丈夫…です。」

膝の土を払ってゆっくりと立ち上がる。手…指は、なんともない。…もう指に気を遣うことはないのに、反射的にそう思う自分がまだいる…。

「とりあえず保健室行ってこい。タイムはまた今度だな。」

先生が校舎を指差す。ああ、あの辺が保健室。

「はい。」

返事してぼくはズキズキ痛む膝を少し引きずりながら、保健室へ向かう。

「失礼しまーす。」

保健室の扉を開けると、そこに保健の先生はいなかった。

…留守？ ぼくは保健室を見渡してみる。…カーテンの引かれたベッドがひとつ…その中に誰か寝ているのだろう。そのほかは、人影も見えない。

…誰もいない…？ 困ったな…。

ぼくはとりあえず乾きかけている膝の血を流そうと、洗面台に近づく。

その時。

「…怪我…？」

背後から鈴が転がるようなソプラノボイス。ぼくはビックリして振り返る。

「あ…！」

…心臓が、飛び出したかと思った。膝の痛みが、一瞬にしてどこかへ吹っ飛んでいった。

何故なら。

カーテンを開けてベッドから顔を覗かせていたのは、見間違うことなんかない、あの…桜の下で微笑んでいたあの顔…。

桜の、精だ…！

ぼくが絶句しているのをよそに、彼女はベッドから降りてぼくに近寄る。それはそれは優雅な身のこなし…まさに妖精のよう…。

「先生さつき電話だとかで職員室行っちゃって…。ああ、転んじやったのね。傷口流して、ここに座って？」

あの時と同じ柔らかな笑顔で、彼女はぼくに言う。ぼくは言われるがままに洗面台で膝を洗う。水が傷口にしみてジンと痛いのに、胸のドキドキのほろが強く、膝の痛みが麻痺してくる。

椅子に座ると彼女が向かいに座って、慣れた手つきで脱脂綿に消毒液を浸している。

「ちょっとしみるけど、我慢してね。」

そう言ってぼくの膝の傷に消毒液をつける。…彼女に見惚れてしまつて、膝よりも胸が痛い…。

これは、夢なんだろうか。

四時間目の終了を告げるチャイムも、ぼくの耳にはおぼろげにしか届いてこない。

丁寧にバンドエイドを貼ってくれて、彼女はぼくに微笑みかける。

「はい、できあがり。」

…なんて綺麗なんだろう。改めて、思う。

桜の精：今回は、天使？

ぼーっと見惚れていた、その時。

ガラガラッ、と勢いよく扉を開けて、誰かが入ってきた。ぼくの夢のような時間は、その扉の音と同じくガラガラと音を立てて崩れていく。

「ゆーなーほつ！ 大丈夫？ お弁当食べれるー？」

元気な登場の仕方に相応しい元気な声の女の子。赤茶けた髪がまた活発さを表している。

「御倉さん。迎えに来てくれたの？」



桜の精の彼女がまた柔らかく微笑んで赤毛の彼女の名を呼ぶ。…と、友達なんだ…。対照的すぎて、意外なんだか妙に納得なんだかよくわからない。

「だって由奈穂<sup>ゆなほ</sup>、今日カップケーキ作ってきてくれたって言ったじゃない。食べたいんだもんっ。」

「…カップケーキ目当てかあ…。」

「そっ、そんなことないけどっ！」

「うそっぞ、一時間寝させてもらったからもう大丈夫。お弁当、食べよう。」

二人はぼくが目の前にいないかのように話をしている。ぼくは思わず呆然と二人のやりとりを聞いていた。

赤毛の彼女が早く早くとせかすので、桜の精の彼女も慌てて立ち上がり、保健室を出ようとす。

扉をくぐる瞬間、彼女がぐるりと振り返り、呆然としたままのぼくに、にっこりと花のような笑顔を見せて、去っていく…。

…あっと、いう間の、出来事だった。

しばらくぼくは呆然とその椅子に座ったまんま。…次に動くまで、一分くらいあったかも…。

ふと机に目をやると、保健室日誌が置いてある。保健室利用者の

クラスと名前とか、書くんだよな、こういつのって。

ぼくは名前を書こうと日誌に手を伸ばす。

…そうだ、さっきの彼女のクラスと名前、コレでわかるじゃん！

自分の名前を書く前に、日誌を見る。あつた！

3 - 1、みどりかわ 緑川由奈穂。

三年一組…、みどりかわ、ゆなほ…さん。

…思わずガッツポーズをしまっていた…。

## 二 同好会 (1)

そのあとの授業に、全く集中できなかったのは、言うまでもない。

三年一組、緑川由奈穂さん…。

そのクラスと名前、そしてぼくの膝にバンドエイドを貼ってくれた時の、あの天使の微笑みだけが、繰り返し、繰り返し、頭の中で飛び跳ねている。

…緑川、由奈穂、さん。

あの時何も言葉を交わせなかった。あまりの驚きとどきまぎする心に、声を出すことすらできなかった。

だんだん心が落ち着いてくると、もったいないことをした…と思えてきた。あんなチャンス、二度とないんじゃないだろうか。こっちは一年、向こうは三年…ほとんど接点なんてないのに…。あんな偶然、今度あるとは思えない。

彼女の微笑みが脳裏に浮かぶ。そのたびに、大きくなっていく、欲求。

また、会いたい。

話が、したい。

…でもどうやって？ 何か、何か方法はないかな…？

三年一組、緑川由奈穂さん。

三年一組、緑川由奈穂さん。

三年一組……！！！！

繰り返し頭の中を廻っていた彼女のクラスと名前が、一瞬、弾け飛んだ。

……そうだ！ 三年……！！

ぼくは授業が全て終わり、ホームルームも終わるとすぐ、音楽室へ……吹奏楽部の活動場所へ、ダッシュしていた。

「明日香先輩……！！」

特別棟、つまり各学年の教室がある本館棟と並列して、渡り廊下で繋がっている、理科室など特殊な教室が入っている校舎の四階、音楽室手前の廊下には、個人練習をしている吹奏楽部の部員があちこちでそれぞれいろんな楽器を吹いている。ぼくはその中に明日香先輩を見つけて、大声で名前を呼ぶ。

トロンボーンを構えていた手を下ろし、明日香先輩はビックリして振り返る。ぼくに気づいて、嬉しそうに笑う。

「浩央くん！ ……入部しに来てくれたの？！」

ぼくは走って乱れた息を整えながら、首を左右に振って明日香先

輩の傍に行く。

「じゃなくて…ちょっと！」

明日香先輩の二の腕を引っ張って、階段の方へ連れて行く。

「なっ？ …え？ 何？？？」

トロンボーンを手にしたまま、明日香先輩はぼくに引っ張られるがまま。

「明日香あゝ、どこ行くの？ もうすぐ合奏。」

「うん、わかってる。すぐ戻るから！」

フルートの三年生に声を掛けられ、焦りつつ返答する明日香先輩。そんな明日香先輩に構わずぼくは、明日香先輩の腕を掴んだまま二階の図書室前の廊下まで連れて行く。本当は三階の視聴覚室前くらいでよかったんだけど、三階廊下も吹奏楽部員がたくさん練習していたので、やむなく二階まで降りてきたのだ。

さすがに図書館前には人が少ない…ていうかない。ちょうどいい。

「ごめん先輩、すぐ済むから…」

ぼくがようやく手を離してそう言つと、明日香先輩は少し怒ったような顔をした。

「入部しに来たわけじゃないのね。」

「うん、ごめん。」

謝ると、明日香先輩はふう、と短くため息をつく。

「…やっぱり音楽は辞めちゃうんだ。」

「うん、ごめん。」

また同じことを言ってしまった。…明日香先輩は苦笑。

「わたしに謝られても…ね。で、何？ 何か話…誰かに聞かれないようなこと？」

さっぱりと話を切り返して、明日香先輩はぼくに尋ねる。明日香先輩のそういうサバサバしたとこ、昔からけっこう好きだ。

ぼくは本題に入るため、ちょっと姿勢を正す。第一楽章から第二楽章に移る時みたいだ。

「あのさ、明日香先輩って…三年何組？」

「へ？ ……三組だけど？」

…なんだ、一組じゃないのか…。ちょっとがっかり。でもまだまだ。

「三年一組の、緑川由奈穂さんて人、知ってる？」

昼以降、頭の中で何百回、何千回と繰り返してきたクラスと名前。

…初めて口にすると、体中の血液が逆流したみたい。心臓がどくんどくと波打っている。かーっっっ、と全身が熱くなる。

そんなぼくを見て、最初きよとんとしていた明日香先輩が、次第ににやりと意味ありげな不敵な笑みを浮かべる。

「ははあん。そゆこと、かあ。」

ますますぼくの体は熱くなる。体温、急上昇。まさか四十度越え？

明日香先輩はくすくす笑う。

「さっそく音楽より夢中になれるモノを見つけたってわけね。いいんじゃない？ …でもごめん、緑川さんて、名前は知ってるんだけど、顔と名前一致してなくて…。同じクラスになったことないからなあ。」

そっかあ…。一気に体温が元に戻っていく。

「あーもう、そんな目に見えてがっかりした表情しないでよ。わかった。いろいろ調べて報告してあげる。」

「本当ですか?!」

ぱあああつ、と霧が晴れて太陽の光が燦々と差し込んできたみたいに明るくなる心。我ながら単純でわかりやすいなあ…。

「…浩央くんてけっこうすぐ顔に出るタイプだよね…おもしろい。」

自分で思ったことと同じことを明日香先輩が指摘して笑う。笑っ

てから、きらりーん、と妙な目の輝かせ方をする。瞳と共に、持っていたトロンボーンも、金色の光を放ったように見えた。

「そのかわり、」

…こ、交換条件？ 何…？ 吹奏楽部入部とかは勘弁してよ…？

明日香先輩はトロンボーンを持っていないほうの手で、ぼくの手をぎゅっぐゅっつと握る。

「<sup>かずみ</sup>弥先輩、わたしの家庭教師になってくれないかなあ？ ね、浩央くんからお願いしてよ。」

「へ？」

一弥、というのはぼくの兄の名前。…ってまさか、明日香先輩…。

まじまじとぼくは明日香先輩を見つめる。…心なしか、明日香先輩の頬はほんのりピンクに染まっている。

「一弥先輩ってK大の理工学部じゃない。わたしも同じとこ、目指してるのよね。だ・か・ら、数学とか見てほしいなあって。ほ、他に特に意味はないのよ？ ホラ、近所だし…」

「ははあん、そゆことかあ。」

さっきの明日香先輩のセリフ、そっくりそのままお返しします。そんなんじゃないんだってば！ と大急ぎで全否定するけど、その赤い顔だとまるで説得力ナシ。明日香先輩もすぐ顔に出るタイプ、人のコト言えないじゃん。



「いいよ、兄貴に頼んでみる。そのかわり、」

「わかってるって。任しといてよ。リサーチとか好きだし、この前言ったよね？ “わたしに何か手伝えることがあったら言ってね” っで。」

明日香先輩は力強くそう言って、握ったままのぼくの手にも力を込める。ちょうどその時、四階から吹奏楽部の合奏前のチューニング音が響く。

「あ、ヤバイ！ 合奏始まって！」

明日香先輩は大慌てでぼくに手を振って、階段を駆け昇っていった。お願いねっつ、と念を押して。

## 二 同好会 (2)

それからすぐにぼくは家に帰ったけど、帰っている途中から、ケータイにひっきりなしに明日香先輩からメールが入ってくる。は…早すぎる…。明日香先輩、部活中なのでは…？

ま、でもそれはぼくにとっては嬉しい悲鳴っていうの？ どんどんどんどん緑川由奈穂さんの情報が集まってきて、どんどんどんどん、近くに感じ始める。

誕生日は三月三十一日、おひつじ座のA型。

好きな食べ物はミルクレープ。

お菓子を作るのが趣味で、得意なのはカップケーキ。

好きな教科は古典、苦手な教科は体育…ってか体はあまり丈夫ではないらしい。

…などなど、基本的な情報が、ひとつひとつ入ってくる。まとめてもいいのに…。まあ、ひとつひとつがぼくには嬉しいから、それでもいいか。

ケータイの画面見ながら、いつの間にか家に着いていた。ただいまーと感情のこもらない情性の言葉を口にしながらも、意識はずつと明日香先輩からのメールにロックオン。

「って！ なんだよ、浩央か！」

何かにぶつかった、と思ったら兄の一弥だった。ぼくが無意識に居間の扉を開けると、兄貴が居間から出てくるのと同様だったらしい。

「あ、ごめん、兄貴いたんだ。」

図らずも心なしか柔和な声になっていた。人って、嬉しいことがあると言動に思いつきり出るんだなあ…。

ぼくの様子に兄貴は目ざとく気づいたようだ。

「ん？ 浩央、なんかいいことあった？ ああ、さては例の彼女、見つかったな？」

…かああつ。ポーカーフェイス決めたかったのに、顔が勝手にのぼせやがった。

「あ、凶星い〜。」

ニヤニヤ顔で兄貴がぼくの頭をぐりぐり撫でる。ちつくしよ、やっぱりぼくってわかりやすいのか？

つと、その時明日香先輩の真っ赤な顔が浮かんで、同時に思い出した。ああそつだ、交換条件！

「それとは別に…ってか、兄貴に話があるんだけど…。」

ぼくは兄貴の腕を振り払って、兄貴を見上げる。ん？ と首をかしげる兄貴。…うーん、明日香先輩、いつから兄貴のこと…。まあ、優しいのは認めるけど。

居間の入口で立ち話もなんなので、とりあえずぼくは鞆を置きに行きがてら自分の部屋に兄貴を引っ張っていく。

鞆置いて、制服から部屋着に着替えながら、ぼくは兄貴に明日香先輩との放課後の一部始終を話す。

「…そおかあ…。俺は実の弟にこの身を売られたわけかあ…。」

話し終わるとぼくのベッドの上に腰を下ろしていた兄貴がぱたんとベッドに倒れこんで言った。

「身を売られたなんて、人聞き悪っ!」

苦笑すると兄貴は腹筋を使って起き上がって反論する。

「だってそうだろうーが。その“桜の君”の情報を得るために交換条件として明日香ちゃんに俺を売った、ってことじゃん。」

「うーん…」

でも明日香先輩の方が強引だったし…なんて言い訳は通用しないんだろうなあ。困った顔をしていると兄貴がぼくの頭をはたいて面白そうに笑う。

「冗談冗談。ちょうどよかったよ。俺先月末でバイト一つ辞めたから、その代わりになるし。明日香ちゃんなら近いしな。」

ちょっとホッとしてぼくもはにかんで笑い返す。その時またメール着信音が。

「あ、また明日香先輩からだ。」

メールを開く。兄貴も横から覗き込んでくる。

『出身は西中。でも今はS町で一人暮らししてるみたい。何でも母親が再婚したからって。』

「へええ、一人暮らししかあ…オイシイな。」

「ふんふん、と兄貴が呟く。…オイシイって、なにが？」

「彼氏いんのかな？」

唐突に兄貴が、最もぼくが知りたいこと…知りたくて知りたくて仕方ないんだけど、知ってしまうのが怖いというか…わざと遠まわしにしていた、最も重要な問題をさらりと saying のける。あ…あえて避けてたのに…っ！

急に動悸が激しくなる。緑川由奈穂さん…彼女の顔を、保健室で間近に見たあの微笑みを思い出して、かあ…と顔が、耳までもが熱くなる。

…そりゃ、あんなに綺麗な人だから…彼氏くらい、いてもおかしくないけど…。

その時再びメール着信音。

「お、またメールだ。」

ぼくの手からケータイを奪い、勝手にメールを開く兄貴。のぼせてポーツとしていて咄嗟に反応が遅かった。さっきとは逆に、ぼくが兄貴の横からメールを覗き見る体制に。

『部活の所属は“超常現象研究会”っていうんだか怪しげな名前の同好会。正式な部活動ではないし、部員（会員？）は二人しかいないんだけど…。緑川さんは一応副会長。会長は“御倉まい”って言って、緑川さんといつも一緒にいる。御倉さんはなんか目立つ存在だし、二人、タイプは正反対なんだけど、すっごく仲が良いみたいだよ。』

…ちよ…超常現象、研究会…？

「…なんか胡散臭い同好会だな…。」

ぼそつと呟く兄貴に同感…。なんでそんな謎の同窓会に所属してるんだろ…？

メールをよくよく見ていてハツと気がつく。“御倉”という名前に、聞き覚えがある。尾の出だしたのはあの保健室での夢のような時間を文字通り（？）ガラガラと音を立てて終わらせてくれた赤毛の女子生徒。…緑川由奈穂さんの友達…あの人が。

「…なあ浩央。」

兄貴がぼくのケータイを持ったままぼくの名を呼ぶ。保健室のシーンに舞い戻っていたぼくは兄貴のその声で自分の部屋に戻ってきた。

「なに？」

「…メール、もどかしくね？ 明日香ちゃんに直接聞きゃいいじゃん。」

「あつ、でも明日香先輩部活中…！」

ぼくが止める間もなく、兄貴はぼくのケータイで明日香先輩に電話をしていた。

## 二 同好会 (3)

「あ、明日香ちゃん？ 俺、そう、一弥。部活終わった？ …あ、帰る準備してる？ ちょーどよかった。今浩央から家庭教師の件聞いたよー。うん…うん、オーケー。いいよ。」

…と和やかに話し始める兄貴。明日香先輩と家庭教師の話盛り上げさせている。お…おいおい、人のケータイで話弾ませるなよなつ。

家庭教師のバイトの話はすぐに途切れそうにないので、ぼくは短くため息をついて無意識に机の横にある電子ピアノの電源を入れていた。…が、電源ランプが赤く点灯しない。二・三回力チ力チとオンオフを繰り返してから我に返った。…そうだ。弾かないように、電源コード抜いて兄貴に預けてたんだっ。カツ、と頭に血が昇る。無意識とはいえ…まだぼくはピアノに頼っている。

そんなぼくをケータイで話しながら見ていた兄貴が自分の部屋の方向を指差す。『コードは俺の部屋にあるぞ』…そう目が言っている。けどぼくは首を左右に振る。

「でも前もってやよい先生に話つけとかなきゃいけないだろ？ え？ うん、そう。」

…ちなみに“やよい先生”というのは明日香先輩のお母さん…つまりぼくと兄貴が習っていたピアノの先生のことだ。

やよい先生と兄貴近々会うのか…きつと明日香先輩と三人でぼくについて余計なコトを話すんだろっ。そう思ったら苦しくなっ



てきた。

「うん、じゃ明日の夜お伺いします。あ、先生のレッスン終わる時間、あとでメールしてね。…ああ、アドレス？　こっちからあとで送っとくから。…でさあ。」

いたたまれなくなって自分の部屋から出ようと兄貴に背を向けた、その時。

「例の浩央の“カノジョ”…うん、緑川さんって言うんだっけ？  
桜の精。…や、こっちの話。…緑川さん、彼氏いんの？」

実にさらりと、今までの会話の流れぶった切って、兄貴が明日香先輩に尋ねる。不意打ちをくらってぼくは慌てて振り返る。

「ちょ…っ！　兄貴！」

ケータイを奪い返そうと詰め寄ると、兄貴はあっさりとぼくにケータイを渡してくれた。そうとは知らず受話器の向こうの明日香先輩は兄貴の問いに返答し始める。僕の顔のすぐ横で、兄貴も耳をそばだてる。

明日香先輩が口を開くまで、そのほんの一瞬の間が、ものすごく長く感じられた。ドキドキドキキ、心臓が体から飛び出しそうだ。

『彼氏、はねえ、』

ドキドキドキキッ。し、心臓痛い！

『今のところ、いないみたいな感じ。』

ひゅうつつ…沸騰したやかんの火を止めた時みたい、頂点まで達したドキドキが下がっていく。でも心臓はまだ熱湯のまんまだ。

『でもね、』

明日香先輩が間髪入れずに続ける。

「でもつつつ?!?!」

思わず力強く鸚鵡返し。また沸騰し始めるやかんの湯。沸点超えてるつつーの!?!!

『あ、浩央くんに換わってる? 緑川さんねえ、彼氏いないみたいだけど、ガードはものすごく堅いらしいよ。さっき言ってた御倉さん、彼女が常に隣にいるし…あ、御倉さんちょっと変わり者で有名だから、近寄りたいうて感じ? それからもう一人、“篠宮英<sup>しのみやひ</sup>人”って、二組の男子。彼が緑川さんに言い寄る男ことごとく排除してるって噂。なんでも中学の時からそんな感じなんだって。』

「そつ、その篠宮って人は彼氏じゃにやいのつつ?」

…慌てすぎて舌噛んだ。受話器の向こうで明日香先輩がうーん、とうなる。

『緑川さんはその気がないというか、ただのお友達というか…。でもそのわりにはよく一緒にいるみたいだし…あ、二人きりじゃなくて御倉さんも一緒だけどね。よくわかんないんだよねえ、その辺。』  
なんか曖昧な返事。

「…友達以上恋人未満ってコトか…？ あ、このフレーズちと死語  
？」

横で兄貴が呟く。…うーん、確かにちと死語だと思うが。そうじ  
やなくてえ。

『…家庭教師のお礼に、もうちょっと調べてあげようか？』

「え？」

『御倉さんと、篠宮くんのこと。気になるでしょ？』

「なります。お願いします！」

即答。…明日香先輩が女神のように思えた。現金だけど。

『了解い。じゃ、またメールするね。あ、一弥先輩によろしくー。』

そこで明日香先輩との通話は終了。…でもまだドックンドックン  
と、心臓が波打っている。激しいパッセージの曲を弾き続けている  
みたいだ。

ケータイを握りしめたままつつ立っているぼくの顔を兄貴が覗き  
込む。

「浩央？」

「…決めた。」

「え？」

ぼくはケータイを握りしめる手に力を込めて、大きく頷く。

「明日放課後、その胡散臭い同好会に乗り込んでみる。」

大真面目で決意したぼくを見て兄貴はやれやれ、と苦笑。でも彼女に近づくと一番の近道は、間違いなくそこしかないと思っただ。僕は思った。多少胡散臭かろうが何だろが。

## 二 同好会 (4)

翌日の放課後が待ちきれなかった。もう授業どころではなかった。…って、入学してあの人に出会って以来、毎日授業どころではない日々が続いているのだが。まあ幸いどの教科もまだオリエンテーションやら中学の復習やらの枠を出ていないから何とかなっている。

明日香先輩からは相変わらずひっきりなしにメールが来る。内容はだんだん緑川由奈穂さんのことよりもその周囲、篠宮英人と御倉まいの情報になっている。

篠宮英人。三年二組、サッカー部所属。

緑川由奈穂さんとは小・中学校からの付き合いで、詳しくはわからないけれど親戚関係にあるらしい。

N町にある篠宮医院の三男、末っ子で、気性は激しく良く言えば情熱的…。緑川由奈穂さんがわりと男子に好印象なのに誰も告げないのは、篠宮英人が排除しまくっているからだとか。

そうしてずっと緑川由奈穂さんに超積極的にアプローチを続けているものの、恋愛関係には至っていないようだ。でも、彼女に今現在最も近いポジションにいる男、というのは間違いではない。

…それから、御倉まい。三年一組、超常現象研究会・会長。

緑川由奈穂さんとは入学以来の大親友。一年から三年までずっと同じクラス、同好会も同じなので、学校にいる間ほとんど一緒にいるといってもおかしくない。

…ただこの人、何だか謎だらけのようで、出身中学不明、家族構成も不明。明日香先輩曰く、あれだけ目立つ存在なのにプライベートな情報がいつさい入ってこなかったそうだ。

唯一の情報は、毎年文化祭で超常現象研究会が展覧する占いの館で、彼女が占う水晶玉占いがやたら当たると女子の間で大人気だということ。普段のはっちゃけたイメージとは正反対で、怖いくらいなんだそうだ。でも文化祭以外では決して占いをするのではなく、いくら頼まれても断固拒否するらしい。だから、あまり彼女に近づく人は少ないとか。緑川由奈穂さんは例外中の例外ということなのかな。

…放課後までに明日香先輩がくれた情報は以上。それを持ってほくはいよいよ超常現象研究会という、聞くからに胡散臭い同好会の活動場所、化学準備室へと向かう。

逸る心を抑えつつ、あえてゆっくりと廊下を歩く。あんまり急いで行って、化学準備室に誰もいなかったらちと恥ずかしいし。

鞆を握る手の平が汗ばんでくる。

化学準備室は確か…特別棟の、三階の端。音楽室があるほうとは逆側なので、視聴覚室と同じ三階にあっても、こちら側にまで吹奏

楽部員は見当たらない。さすがにいろんな楽器の音はバンバン聞こえるけど。

### 化学準備室。

ドアの上のプレートを確認して、ドア越しに中の様子に耳をそばだてる。…なにやらカチャカチャという音と、女の子の笑い声が聞こえる。…途端に鼓動が速くなる。今、ここに…間違いない、あの人がいる…。

息苦しくなる。心臓が口から飛び出しそうだ。発表会なんかでもこんなに緊張したことないのに…。全身が心臓になったみたい…生まれて初めての、感覚。

こういう時は…とりあえず深呼吸だ。落ち着け、と自分に言い聞かせる。

目を閉じて三回深呼吸。多少、楽になったか？ 息はさつきよりしやすくなっただけど、それでもまだ心臓はバクバクいつてる。

…でも、ここまで来ておいて…突入しないわけにはいかない。

意を決して、扉をノックしようとして右拳を振り上げた。震える手に力を入れ、扉を叩こうとした、その時だ。

ガッ、と右腕を背後から掴まれた。ものすごい力で。

ビックリして、実際十センチくらい飛び上がったんじゃないかと思う。大慌てで振り返ると、わりと背の高い上級生の男の人が、ぼくの右腕を掴んだまま、見るからに敵意剥き出しの表情で言った。

「お前かつつ、由奈のストーカーってのは!!!」

「は、はいいいっつっ???!!!」

自分でも情けないくらい間の抜けた声を出してしまった…。襟元のラインは三本線…三年生…ひよっとしてこの人…!

「しっ…篠宮英人?!!!」

気付かず声に出していたようだ。ぼくの予想は的中していたらしく、その人はぼくの右腕を掴む手によりいっそう力を込める。いっ…痛たたたた…ッ!

「おまけに先輩に向かって呼び捨てとはいいい度胸じゃねえか一年ボーズ!」

ひいいいっつ、情報に違わず、気性激しいっつ。

思わず涙目になってしまったその時、化学準備室のドアが開く。

「…な…んか騒がしいと思ったら…篠宮かあ。」

顔を出したのは赤茶けた長い髪を後でひとつに束ねた女生徒。ニヤニヤ、意味ありげな表情で楽しそうにぼくと篠宮…先輩を代わる代わる見ている。

あ、思い出した! この人、“御倉まい”!

「なーに? どうしたの?」



そしてその後から覗き込んだのは…言うまでもない。ぼくがこの数日焦がれて焦がれてたまらなかったその人、張本人…緑川由奈穂さん、本物だ!!!

掴み上げられている腕の痛さも一瞬にして吹っ飛ぶ。足の先から頭の先まで、体温がものすごいスピードで上昇していくのがわかる。

「英人くん。…と、あれ、あなた確か…」

緑川由奈穂さんがぼくを見て、少し言葉を止める。ぼくは彼女が自分を見ているという事実、それだけでもういっぱい。思考なんか、完全ストップ。

「…怪我、大丈夫だった？」

にっこり、天使のような微笑みをぼくに向ける。…覚えていてくれてるんだ、保健室のこと…。

ぼくは慌てて頷いた。

「は、はいっ。」

…また声が裏返って変になってしまった…恥ずかしい。

「…とりあえず、廊下でつつ立ってんのもなんだし、二人とも、入ったら？」

赤毛の彼女がニヤニヤ顔のままですらう言って、ぼくと篠宮先輩を化学準備室に招き入れる。ふん、と息を吐いて篠宮先輩がぼくの腕

を掴んだまま扉をくぐるので、ぼくも強制的に中に入ることになる。……まあ、最初から入るつもりではいたのだけれど……。

化学準備室の中は、準備室の名が示すとおり、化学の実験用具やらなんやらかんやらが所狭しと置かれている。あまりに物が多すぎて、整理整頓されているのかわからないのか、よくわからない。いろいろな物に囲まれた部屋の中央、パイプ椅子がふたつと事務机……その上には、この場にそぐわないちよつとオシャレなティーセットが置かれている。電機ケトルと、白地にブルーで花の絵が上品に描かれたティーポット、ティーポットお揃いの柄のティーカップが二客。カップの中からほんわかと湯気が昇っているところを見ると、どうやらお茶は淹れたてのようだった。

「英人くん、今日はサッカー部お休みなの？」

桜の精と言うに相応しい落ち着いた心地良いメゾ・ソプラノ。……緑川由奈穂さん……緑川先輩、が篠宮先輩に問いかけながらあと二人分のパイプ椅子を広げ、ぼくらに勧める。御倉先輩が背後のスチール棚から、事務机に広げられているティーセットと同じ柄のティーカップを二客取り出してお茶を淹れてくれる。

篠宮先輩がようやくぼくの腕を無造作に離して、どかっとな椅子に座りながら吐き捨てる。

「今日は自主的に休み。由奈がストーカーされてる、なんて聞いておとなしくサッカーなんかしてられっか！」

「……ストーカー？」

「ああ。コイツ、昨日からいろいろ由奈のコト嗅ぎ回ってるって、

御倉に聞いて。」

緑川先輩が御倉先輩を振り返る。御倉先輩は相変わらず楽しげにニヤニヤ笑っている。緑川先輩がふうう、と長いため息をつく。

「…そういうこと、どうして当事者のわたしじゃなくて英人くんに先に言うかなあ…。」

「だってそのほうが面白そーだったから」

御倉先輩は悪びれもせずけらけらと笑って言い放つ。そして面食らってつつ立ったまんまのぼくに、その笑顔のまま椅子を勧める。

「座つたら？ どーせここに来るつもりだったんでしょ？ お茶も入ってるし。」

「は…はい。」

言われるがままぼくは篠宮先輩の隣のパイプ椅子に座る。すると緑川先輩が脇に置いてあった紙袋から可愛いお弁当箱を取り出す。

「今日はクッキー焼いてきてたの。御倉さんと二人で食べるにはちよっと多めだったかな…って思ったからちょうど良かった。」

そう言っただけを開ける。中にはいろんな型のプレーンなクッキー。…うわあ…美味しそう…。クッキーにさえ、惚れてしまいそうだ。

「…で、ストーカー、って？」

小首をかしげて緑川先輩がぼくに向かって尋ねる。一度治まったかと思われた体温上昇がまた一気にピークに達してしまふ。鏡を見なくったって、耳まで、いや足のつま先まで茹でダコ状態になっているのがわかる。そんなぼくを、御倉先輩は面白そうに、篠宮先輩は攻撃的なまなざしで、そして緑川先輩はピュアな表情で見つめる。三人三様の視線を集中的に受けて、ますますぼくはテンパってしまふ。

ああ、何か、何か言わなきゃ。あわあわしながら頭の中で適切な言葉を探す。

「あの、えっと…その…、始業式の日朝、桜の下にいたあなたを見て…、もう一度…会いたいって思ってる…」

しどろもどろ、自分で何言ってるか全然わからない。

「ふんふん、ヒトメボレ、ってやつね。」

御倉先輩が相槌を入れる。

「あの…それで、…えっと…」

えーと…その後何を言えば…。ぼくは必死に台詞を組み立てようとする。けど、真っ白になって、何も出てこない。焦れば焦るほど白くなる頭の中。

「だからいろいろ嗅ぎ回ってここにたどり着いたってワケか。ゴクローなこって。そんでこのアヤしい研究会に入部するって言いに来

た…なんてこたないよな。」

「超常現象研究会はアヤしくなんかないよ。神七先輩かなが作った研究会だもの。ねえ御倉さん。」

「…うーん…どうかなあ。…少なくともネーミングセンスはナイなあ…。今時“超常現象”って。せめて“スピリチュアル”とか…。」

「もっツ！ 御倉さん会長でしょっ?!」

ぼくがわたたわたしている間に三人で繰り広げられる会話。…研究会…入部…そうだったっっ!!!

なにか長調的なアルペジオが聴こえた気がした。その瞬間、口を突いて出た言葉は。

「…あのツ！ …入部、します!!!」

三人ともぼくの声に驚いてビクンとする。緑川先輩と篠宮先輩がぼくをまじまじと見つめる中、御倉先輩だけがホクホク笑みを浮かべている。

「はい、じゃあ入部届に学年・クラス・名前を書いてねっ。」

そう言って一枚のプリントをどこからともなく取り出して、ボールペンとともにぼくの目の前に突き出す。ぼくはその用紙とボールペンをおさおすと受け取り、大人しく記入する。…なんか、何だか…。

「あ、そういえばまだ名前を聞いてなかったよね。」

緑川先輩が思い出したようにそう言う。ぼくはプリントに記入する手を止めて、慌てて緑川先輩に向き直る。テンパリすぎて自分の名前も名乗ってなかったなんて…頭悪すぎる…。

「一年三組、崎谷浩央です。」

「…サキヤ…、ヒロオ、くん…」

「あつ、漢字はこうです。」

ぼくはプリントの氏名欄にフルネームを書いてみせる。緑川先輩をはじめ、残り二人の視線も集中する。

「…ヒロオくん、って、こういう字書くんのだ…。」

何故か緑川先輩はそう言うって遠い目をした。どこかはかなげで、淋しげな瞳。そして篠宮先輩の心配そうな表情、御倉先輩までもが少し気を遣ったようなしんみりした顔になっている。…え、なに？この雰囲気…。

「あの…どうかしましたか？」

遠慮がちに尋ねてみる。と、緑川先輩はその淋しげな目のまま笑顔を作ろうとする。…無理っばい微笑み方が、ぎこちなくて心に痛い。

「わたしの兄がね、字は違っけどヒロオって言うの。」

「えっ、そうなんですか。奇遇ですね。奇遇といえどもうひとつ、

ぼくも兄がいるんですよ。」

…と明るく返してみたものの、なんか違和感…。篠宮先輩はぼくをまた睨みつけているし…。いったい、何？ なんなんだ？

緑川先輩がぼくをすごい目で睨んでいる篠宮先輩にふわりと微笑みかける。それこそ桜の花びらが舞うかのような、繊細で柔らかな微笑み。ぼくはまたその表情に釘付けになる。

「英人くん。いいよ。わたし、大丈夫だから。」

篠宮先輩はふい、とぼくから視線を外して毒づく。

「…ストーカーして俺の名前ですらりサーチ済みのクセに、その情報は入手してねーのかよ。」

…え？ その情報…って？ 緑川先輩の、お兄さん…のこと？  
そんな情報は全くなかった…。

きよとんとしてしていると緑川先輩が今度はぼくにその桜のような微笑みを向ける。さっきと同じ、淋しそうな笑顔…。ぼくの心がきゅっつっつと甘く締め付けられる。

「兄はね、二年半前に事故で亡くなっちゃったから、今はもういないの。」

「…そうだったんですか…。…ごめんなさい。」

ほんの少しの間重い沈黙が化学準備室を通り抜ける。けど、御倉先輩がその重い空気を一掃した。

「…三人とも、お茶、冷めちゃうよー。今日はアプリコットティーだから、クッキーに合うはず…。」

極めて明るくそう言って、クッキーをかじる。

「…うん、今日もサイコー　　やっぱり由奈穂のお菓子は美味しいよねー。」

「ありがとう。…ホラ、英人くんも、崎谷くんも、どんどん食べてね。あ、そういえばわたしたちの自己紹介もしなきゃね。」

和やかな雰囲気に戻ってきた。緑川先輩の明るい笑顔を見て、ぼくは心底ホツとする。

「てかコイツ俺らの名前なんかとくに知ってるだろ。自己紹介なんか必要ないって。」

その後はこんな感じで和気あいあいと（…一部そうでないところもあるけど）クッキーにアプリコットティーでたわいない話をしながら下校時刻までティータイム。これがこの超常現象研究会といふいかにも怪しげな名前の同好会の基本活動だということを、ぼくは二日もしないうちに知ることになる。

成り行き任せと勢いで入部してしまったけど…おかげで緑川先輩と毎日会えることになるし、ピアノのこともすっぽりと頭から抜けてしまつて一石二鳥…ってコトに、なる…のかな？





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1752f/>

---

桜舞う音

2010年12月12日17時40分発行